

# 教育課程編成委員会

2024年度 第1回委員会 議事次第

## 1.日時・場所

2024年11月14日 18:00~20:00

修成建設専門学校 1号棟6階161教室

## 2.出席者

### ● 委員一覧 ※ 敬称略

#### Aグループ

・倉方 俊輔・田中 義久(欠)・井上 久実(欠)・小池 祐也・作本 博昭・内倉 悠  
・山下 裕貴・鍵谷 啓太・角野 峰生・辰井 菜緒・釜友 知與子

#### Bグループ

・西濱 浩次・辻 裕樹(欠)・佐藤 榮一・中村 裕輔・坂入 喜代枝・今西 良介  
・見邨 佳朗・山本 順也(欠)・廣辻 雅之・稲原 泰裕

#### Cグループ

・米良 力・奥村 安史・吉松 吾朗・土橋 傑・槇村 吉高・當内 匡  
・上田 正敏・川端 晴江・野瀬 孝男・堤下 隆司・谷川 博康・広瀬 一樹(欠)  
・上杉 敬史

## 3.配布資料

### ● 2024年度 第1回委員会 議事次第

### ● 委員一覧

## 4.議事次第

(議事：辰井)

### ● 学園より挨拶

山下理事長

この会議を行う事で、教育の質を高めていきたいと考える。

来年度から新カリキュラムとなる学科もあり、今までの皆様の意見を集約した形でスタートを切る予定である。

少子化や都市部への一極集中も叫ばれる中。新しい学びの忌憚なきご意見を頂戴致したい。

#### 見邨校長

本日会議開催のお礼と、専科2級建築士の教室（161）を紹介。学びのスタイルを体感していただきたく、本日はこの教室での開催とした。

修成は、創立114年目を迎え今後も時代の変化と共に前進していきたい。

## ● 学校全体について

#### 見邨校長

今年度より、多様化に対応し、細やかなフォローができるように

副校長2名体制をとっている。ABDR科は鍵谷副校長、CFG科は野瀬副校長を任命した。

- ・次年度より、夜間N科が学科名称変更となりあらたなスタートをきる。

N科は、土曜日に授業を設け、昼間部に引けを取らない内容で実習など多岐にわたる授業を展開する。

- ・大学併修プログラム、次年度より大阪芸術大学とスタートをきる。
- ・コンソーシアムの立ち上げを紹介。

「衣・食・住」専門学校コンソーシアムOSAKAは、上田安子服飾専門学校、大阪調理製菓専門学校との3校。

お仕事体験フェス『ミラクル』を開催。繋がり先の先にある専門学校の取り組みを3校の学生と大阪建築士会で行った。それぞれの分野で学んでいる専門学生が一堂に会し活躍してくれた。

- ・サマースクールin高島市

滋賀県建設業協会高島支部×高島市との共同で、夏季休暇を使用し初めて開催した。建設現場見学や、職業体験など、報告発表会を行った。

高島市とは、連携協定を結んだ。

- ・なにわ建築フェスタ・ダンボールハウス

「災害時に避難所で大人2名、子供2名が利用できるダンボールハウス」  
をテーマに作品を出展。3作品すべて優秀賞を受賞した。

上記で紹介した事例は、本カリキュラムとは別で有志学生の参加であった。

・修成教育研究所 資格対策

1級建築施工管理技士、12名合格。

1級土木施工管理技士、5名合格。

資格支援を今後も拡大させていきたい。

・阪南市のまちづくりに関わる動き

E科、H科で「まちづくりファシリテーター養成講座」の授業を実施している。  
利活用提案を今後展開していく。

### 鍵谷副校長

#### 建築系学科（ABDRNEH科）

A科：さまざまな領域を学ぶ。卒業生が講師として教壇へ、担任をもつといったケースが増えている。若手教員とベテラン教員がまじりあうことで相乗効果がうまれている。

B科：今年度より学科名称を変更してスタート。BIM、プロジェクトマネジメントといった職業教育に取り組んでいる。

R科、今年度より学科名称を変更してスタート。施工分野での活躍、建設DXといった新時代の施工管理に取り組んでいる。

D科、進路の多様性に対応する学科である。産学連携の取り組みやインテリア資格塾を開講しニーズに沿って運営をしている。

N科：次年度より学科名称を変更してスタートする。学生は多岐に渡り、他分野から建築分野への転職希望、リカレント・リスキング教育、大学とのダブルスクール、高校からストレート入学など、多様性に対応する内容となる。

E科：学科合格率39.1%（全国）→91.3%（修成学生）

H科：学科合格者26名→17名で65.4%

いずれも全国平均を大きく上回る実績となっている。

国家試験対策として、夜間の時間帯に講習会を実施。本科学生も対象であり  
今年度は、2級の学科合格6名となった。→H科への飛び級も可能となる。

- ・新しい専門学校の学びをつくるを目標に。

倉方先生のご尽力により、来年3月開催の安藤忠雄氏の展覧会に学生20名がプロジェクトに参加をしている。住宅作品を模型にして展示する内容で成長する又とないチャンスに挑戦中である。

#### 野瀬副校長

##### 土木造園系（CFG科）

令和6年度より、施工管理技士の受験資格が改定され、土木施工管理技士1級の対策講座を全8回実施。在校生も参加し、5名が合格した。

施工管理技士2級も積極的に挑戦。留学生も学科試験に合格している。

造園施管理技士試験にG科全員受験予定である。

施工管理技士の2次試験は現場での経験を記述にまとめる形式であり、資格講習会では記述内容を個別に添削を行っている。

卒業生へのバックアップも実施し、資格取得を後押ししている。

G科では、造園技能士の合格者もあり、前を向いて取り組んでいる。

若年者のものづくり競技会に1名が参加。受賞は叶わなかったが爪痕を残せたのではないかと自負している。

現在は、産学連携としてイズミヤ福町の公開空地の整備に取り組んでいる。

学生成果発表会でも内容を学生自身が発表。確実に自信につながっている。

## ● 分科会

### ○ 建築分野報告：Aグループ（議事：辰井）

鍵谷：【修成で学ぶ学生たちの価値】とはをテーマに進めていく。前半の内容を聞いて感じた事をお聞かせいただきたい。

内倉：課外活動が多く、リアルなコンテンツの中でプロジェクトに携われる印象。ささいな発見をどう解いていくか。それができるのは魅力的。大学は抽象的な課題が多く実践とは遠い。どこからこのような活動がうまれるのか？

山下：自治体からの相談やこちらからの申し出もある。ケースバイケース。高島市だと地元産業の活力・人材確保が課題であり、修友会を通じて実施できたケース。

いろんなチャンネルから取り組んでいる。

もちろん学生だけで【考える】がスムーズにいかず、教員側がレールをひくこともある。予算を考えることで、実務にもつながる。ハードルはあるが、学びの体験成果は上がっている。産官学連携は今後も求められていくと感じている。

倉方：大学では、研究室単位で成果を求められる。自身の勤める大阪公立大学では、もともとの府大が、産官学民の連携・国際化を2大主張とし、企業との繋がりが強い。もともとの市大は、行政に強い。

大学はアウトプットの評価が論文で、空疎な数字を追いかけるのが実情ではある。専門学校は、リアルな体験をできるところ、建設の一通りの出来事を体験できる。大学ではありえない取り組みができると感じている。

修成の取り組みは、地元の方々からすると、刺激的で・活気となるうえ、学生は経験となる。経験は裏切らない。率直な副産物がでてくるのが専門学校のよいところ。

鍵谷：ほめてもらえることが学生の宝となる。今後も専門学校の役割を見出していく。

鍵谷：建設業界の課題のひとつである人材不足。DX化が進み専門学校で学ぶ強味とは？大学全入時代となった今、あえて専門学校で学びたい学生への教育内容が今後は課題となる。どのようなアイデアが考えられるか？この時代の専門学校の立ち位置は？技術者を育成するうえでご意見をお聞かせいただきたい。

作本：施工は建築を学んでいない人も就職をしてきている。専門学校2年間の学びは非常に魅力的。修成は国家資格合格率が驚異で、資格取得をすることは、本人の喜び・自信につながる。

建設業界で働くうえで、資格は強味となる。

関係企業の様子をお話すると、修成の卒業生は仕事を辞めない。それは、就職活動・就職支援の体制が整っているからだと感じている。

広報的にも、【就職後】のアピールもするべきではないか。

業界に、卒業生が多数いると良い意味での【学閥】となって先輩が後輩の面倒をしっかりとみている印象。相談ごともしやすいのではないかな。技術職は、学び続けられないといけない。先輩がいると安心にも繋がる。

ただ、業界全体を見渡すと、入社条件が非常にゆるくなっている。

いわゆる【学部不問】の状態。それが故、若手の質が下がってきている。そこが今後の課題ではある。

内倉：離職率の低さは魅力である。建築・土木が好きだなと思う瞬間が学生にあるのかなと思う。その思い・経験は実務に入ってからでも大事になる。大学だと、好きだなと思う瞬間に出会うことなくなんとなく学生時代を過ごして、そのうち建築を嫌いになる子も多い。

倉方：スピリット。建築ってこういうもんだ。と、知らず知らずにわかるようになる。なかにはいると当たり前だけど、同質意識があるのは素敵である。

鍵谷：設計塾という放課後の課外活動を有志で行っているが、希望をもって入塾した学生が課題を重ねるごとにどんどん減っていく。建築は我慢大会ではないので、学ぶ楽しさ、続けていく魅力を発信していきたい。褒められるのが、今の学生の【次に頑張ること】につながるのではないかな。

倉方：我々が学んだ時代とは違う。大学でもキツイ事はあまり言わないようにしている。褒めて・褒めて、機嫌をとってやらせる。昔は褒めるとやらない傾向であったが、今の子は真面目だから、褒めるとやる。【褒める教育】が今の学生にはあっているのでは。受けてきた教育が初等教育から違う。我々が現代に合わせるべき。ただ、たまには厳しい事も言わないといけない。

鍵谷：【学生に寄り添う】ほったらかしにしない。近くに居るという事を大切に。を修成でも実行している。経験がどこにつながっていくのか、職業人教育をする場である認識は忘れてはならない。

鍵谷：就職した卒業生の中でも、すごく活躍している卒業生もいる。活躍できる人材とそうではない人材の違いはあるのか？お聞かせいただきたい。リスキニングは取り入れてはいるか？

小池：やりたい事がある子は頑張る印象。事例をあげるとサーフィンファーストで今も勤務をしている人がいる。仕事とプライベートを切り分けてできることもひとつの形ではないか。

仕事だけでなく、何か打ち込むものがあれば頑張るのだと思う。

私自身は、新しい仕事に出くわす事が楽しくて続けている。会社で率先して勉強会などはないが、好きな子は個人で参加したりもしている。講習会などの費用は会社が面倒をみってくれる。

リスクリングにつながる事例は、あまりない。

鍵谷：BIMの利用は実務ではどうか？データの扱いは？

小池：BIMは入力をするというより、利用する立場である。積算でいくと図面を読める事が大事。

辰井：B科では1年生の後期からBIMを取り入れている。データの作り方や保存方法、基礎の部分である。

BIMを覚えだすと、2Dで作図することを面倒くさいと感じる学生も出てくる、BIMはなんとなく図面が書けたように感じるのが怖い点でデータをよくよくチェックすると建築の基本原則がわかっていないパターンもある。今後の課題と感じている。

内倉：大学はそもそも、BIMやCADの教育を提供していない。自分で覚えるもの。そんな印象である。

倉方：ものごとの原理を理解するようにならないといけない。最近の中学入試の問題を見ても過去問だけでは事足りない。原理がわかっていないと解けない問題もある。つまり、社会に適応する人間の育成を国が始めていると感じる。人間の仕事は原理がわかっていないとできない。もともとの原理を理解する努力が必要となってくるであろう。

小学校では寄り添う教育、中学高校では・・・？あたた先生による・・・？疑問が残る学生もいるであろう。専門学校で寄り添うといった事は学生からすると人生を左右することかもしれない。大学や他の学校をみても数十年前の教育をいまだにしているところもあり、社会全体の課題でもある。現状に合わせないといけない。ただ、変わらない原理は大切にしないといけない。

鍵谷：他校の先生と話す中で、修成の学生は図面を書く作法が良いとお褒めの言葉をいただく事がある。思い返せば過去の教育課程編成委員会で、職人としての学び、専門学校の立ち位置を念頭において展開してはどうかと言ったお言葉をいただいたことがある。ずっと心に残っている。

クラフトマンとしての建築教育、職人としての学び。スキルを磨きつつ人間教育も必要なのかと実感している。A科・E科はどうか？

角野：A科は、多様な学生が多い。職人肌の学生の傾向は、専門学校に入りたい！と思ってきている。勉強が苦手・嫌いだから、専門学校にきたという子もいる。だが、いずれも卒業する頃には、それなりの大人になって卒業していく。不思議ではあるが交じり合って相乗しているであろう。

釜友：E科は、3年目に成長するシーンもある特に内面の成長が大きい。

グループ学習や、班長・副班長制度を実施。教え合うという授業を展開することで仲間意識が生まれ、クラス全体の底上げができていると感じる。それは、合格率の向上にもつながる。

ただ、模擬試験がきっかけで距離をとる学生もいる。モチベーションを維持する工夫を施している。

先輩から後輩へのメッセージを貼り付け、鼓舞する。

鍵谷：資格の合格を目指す立ち位置、この子大丈夫かな？と思っても建築士に合格するというシンプルな目標があると強い。合格するという事実以上に得られるものもある。

倉方：プレッシャーに常にさらされていると思うが、プレッシャーに負けず頑張れる方法はあるか？

釜友：前期は点数評価のみ。やはり競い合うことも大切。後期は、BIM授業や積算・見学会などを実施している。

倉方：受験の先に目指すものはどのような姿か、具体的に描けるか。それも重要。【受験は正直である。努力は点数になる】これにつきる。

その空気（E科）の中に入って勉強したい。と思わせる事も大事。資格は人を変える。資格があると、選択肢も広がる。そこに行くための具体的なステップが大切。

内倉：外部講師や実務者を呼んだ講義はないのか？



釜友：見学会内で講義をしてもらうことや、実務者に来てもらうこともある。

辰井：B科は、普段授業で触れる事のないプロジェクションマッピングや模型の実務者を呼んで講義をしてもらうこともある。

鍵谷：D科は、各企業のショールームが減っていることもあり、有志で見学へ出向く。こちらが旗をふってもあまり乗ってこない・・・といった学生との世代間のギャップがみられる。有志学生には、他所ではできないことをできたという実感を持ってほしい。

頑張った子が成長する姿を、他の学生にも見える事が大事。

鍵谷：以上、短い時間ではあったが建築分野報告会を終えたい。ご意見ありがとうございました。

#### ○ 建築分野報告：Bグループ（議事：廣辻、補足稲原）

見邨：いくつかのテーマについてご意見をいただきたい。

##### 【人材不足】について

中村：私の仕事は、内装の設計施工をやっているが、最近の社員は辞めるのが早い。設計職は比較的長く持つが、特に現場の人間がすぐ退職する。転職しやすいという風潮も関係しているかもしれない。プロダクト部門も退職者が多いが、これは業務内容をよく理解せず、プロダクトデザインと勘違いして入社している様子も見受けられる。

今西：ゼネコン業界は「人」がすべてといえる。人材不足については「定年の延長」で対応している。定年が60歳だったところを65歳に延長し、更に「70歳までどうですか」と言っている。給与については、元の金額の75%とし、年金と合計するとほぼ減らない。新しい社員は入らないので「今いる人をいかに残すか」という方向で考えている。また、若手の意識が我々の時代とはかなり違ってきている。例えばコミュニケーションでは、「飲みには連れて行ってほしくない」が若手の本音で、先輩とのコミュニケーションを通して「技を盗もう」などという人はいない。働き方改革の45時間の規制等もあり、厳しい指導もやりにくくなっている。

坂入：私のところは、40代後半から60代、70代の方が多く、30から45歳位は数人しかいない。若手は離職率が高く、定着しないことに加え、

大手に取られてしまい、入社してくれない。それに対しては、「採用の早期化」で対応し、現在、2026年度の採用が既に始まっており、2027年度の分も動いている。また、若手の感覚が分からなくなっている。仕事が終わった後の在宅での資格取得等の勉強を薦めても「これは残業ですか」と言われてしまう。

佐藤：私は元銀行勤務で退職して20年経つが、昔は深夜残業が当たり前で、周りも全員同じように働いていて不満や疑問を持つ事もなかった。今の人は昔とは違う。お互い理解できないし、最近は、あまり言わないようにしている。資格についてだが、例えば、一級建築士も地位が下がってきているように思う。一級建築士資格を持っていても、それだけでは評価されない状況なのではないか。また、今の若手は脆弱でひ弱く感じてしまう。私は現在、海外との繋がりのある仕事をしているが、海外から来ている人達は日本人と比較して、仕事にしても勉強にしても取り組む熱量が違う。貪欲で何でも吸収しようという意欲がある。日本人は普段が満たされているからか、何事もおとなしく控え目である。上昇志向の若手がいないように感じる、世間はまだまだ学歴社会、もっと実力主義的な目が必要、海外留学を希望する学生がいれば紹介できる。

西濱：私のところはアトリエ事務所なので、社員は数名程度で、将来は独立したいと考えている人が殆どである。なので仕事とは言っても、半分は勉強でもともと在籍期間は短い。優秀な人ほど早く辞めてしまう。ただ、最近の若い人の気質が昔とかなり違ってきていて、特に新型コロナ以降は顕著であるが、とにかく「弱い」という印象である。「夢がない」「頑張らない」。人材不足で他にいくらでも受け皿があるという事も影響しているかもしれない。こちらとしては、「気持ちよく、楽しく、機嫌よく」働いてもらうという風に今は考えている。自分に投資することをしない、コミュ力についてはよく話している。

#### 【修成で学ぶ強み】について

中村：技術や知識などよりも、もっと大切なのは「コミュニケーション力」。自分の眼で「俯瞰して」状況を見られるようになる必要がある。伸びない人は、自分の範囲の事しか考えない。現在は学ぶ方法は

たくさんあるが、修成のようなところで、先生や仲間と一緒に学ぶことでコミュニケーション力を習得出来るのではないか。

今西：企業が若い人達に求める能力は「考える力」である。知識を覚えるだけではなくて、「生きていくためのコツ」「生き方を考えさせる」といった自分で考えていくような授業を専門学校には作って頂きたい。

坂入：今の若手は周りに情報がありすぎて悩んでいるように感じる。正しい情報、必要な情報を「選択できる力」が必要と考えている。また、建築以外の事柄も学んで欲しいが、企業は人材不足で社員を手取り足取りして教育している余裕がないのが実情。特に若手社員については、分からないことがあるとすぐに周りに聞いたり、チャットGPTに頼ったりして「自分で苦労して調べてみる力」が欠けているように思われる。ただ単に目の前の問題をこなすだけで終わってしまい、何を考えるべきか、何をすべきかがぼやけてしまっているのではないかとと思う。

佐藤：現在でも、大卒、高卒等の学歴での差別は残っていると思われるが、修成の学生はよく勉強しており、能力のある人も多い。修成には「長い歴史と人脈」があるので、そのような人と人、企業と人のつながりがあることが強みではないか。私は仕事で海外の企業や学校等とも繋がりがあるので、希望する人には、海外の企業や学校に就職や留学の紹介することもできる。

#### ○ 土木・造園分野報告：Cグループ（議事：上杉）

野瀬：在学中に学生に求める教育についてご意見をいただきたい。現在の教育、取り組み、留学生状況

土橋：土木のことを広く浅く知っている人材が来てくれたら嬉しい。他分野から来た方は入口の説明で時間がかかる。自身も卒業生で在学中は昼間建設の仕事を経験しながら、夜勉強できたことはよかった。

米良：基本、企業の新入社員の研修、職業訓練をしている。利用される企業で利用される方は、文系の方が増えており、約半数ほどになっている。そのため教育の面でも苦労するところはある。利用するゼネコン

で新入社員は増えているが、文系出身が多くなっている。教える側からも将来に対しての懸念もある。

野瀬：土木を志す学生がコロナ渦以降減ってきている。

上田：大阪市も人員不足になっている。特に土木分野においては、定年退職者等に見合う職員採用枠に対して、採用人数が不足する状況が続いている。このため、後期の採用募集も実施されている。過去と比べれば、入りやすくなっていると思われるので、公務員志望の学生がいれば、学校の方で公務員受験の指導をして、受験させてもらえれば良いと思う。造園分野においても過去に比べ、採用枠が増えているので、入りやすくなっている。

槇村：設計施工一環で仕事している。知識を広く浅く持っており、Auto-CADが出来る人が望ましい。数年でやめる人もいるが、会社としては熱意を持って育ててもやめるとなるともどかしい。植物を知ってもらっていることはありがたい。教育の中でも植物を知る内容があればいい。植物の名前や特徴を学べる内容の教育をやってもらいたい。

吉松：重機土工をメインでやっている。ICT分野も広がり、取り組んでいるためそのあたりの知識があることは助かる。留学生については、現在N3相当で入社している。特定技能の活用もしおり、長く働けるように協会に対しても働きかけている。無人化施工や遠隔施工も取り入れているため何かあれば相談して欲しい。

奥村：土木建築のゼネコン。人材について、欲しい人材は構造力学が出来る人材。仕事をするにあたり構造力学がどうしても必要。もっと勉強しておいて欲しい。25年頃から採用が難しくなっていると感じている。入社する学生も人手不足を感じており、その中で自身が入社していることをわかっており、考えが甘い方もいる。学生には職業意識、仕事に対する意識、考えを伝えて欲しい。仕事が好きであれば、頑張って仕事に取り組める。土木が好きな学生が欲しい。学生に土木の仕事の意義、世の中で役に立っている、素晴らしい職業を目指していることを学生に伝えて欲しい。

當内：樹木や植物の特徴を学んでいる。現場で対応できるスキル。施工管理への意識を持っている。今後は外国人材も求めているといけなとも感じている。

川端：公共工事、民間工事、施工をしている。10年目の卒業生。勉強している時は設計や管理についてまだわかっていなかった。分類わけをもっとしてもいいのでは。公共工事とは、民間工事とは、自分が得意なことや好きなことを見つけられる授業が必要だと感じた。授業を受けているときに自分が今何をしているかがわからないことがあったため、そこが理解できるように自分が好きなこと興味あることに取り組める授業もあっていいと思う。

野瀬：資格の目標も掲げて学生には指導をしている。施工管理や技能士などの資格取得に指導を今もしているが、資格の指導をしながら他にもどのような指導をしていけばいいかご意見をいただきたい。

土橋：RCCMの資格がないとコンサルとして役所仕事ができない。行政や役所が求めている内容を網羅している資格になっている。施工管理の資格も業界の中では使用しているためあった方がいい。下水道技術検定、コンクリート技師など。資格はたくさんあるので、施工管理だけではなく色々な資格に目を向けて欲しい。

米良：専門工事業者から技能講習講座に発展した。資格と言えば施工管理になると思う。体系的に学校の中で話をしているが、社会に出ないとわからないことが多い。そのため、学校で丁寧に説明をしても、現場でないとわからない。学校で混沌と学生に伝えすぎると、学生側がわからないとなって興味を失ったり、嫌になったりしてしまうことがある。道徳的な教育も必要になるのではないか。

上田：街路樹等の危険木撤去に関して、市民からは誰が判断して危険としたのか、という問いが多く寄せられ、行政側の緑の専門職員と言っても理解されない状況にある。今は資格を持つ樹木医の判断といった回答でないと理解されない。

槇村：公共工事は金額が高く、資格が当然必要になる。若い人材が施工管理の資格を取ると経審点が高くなるため、早く2級を取って、1級に繋がってもらいたい。資格を取ると資格手当も出すことができ、本人のモチベーションも上がる。学校でも資格を取得することで、企業に貢献出来、給与等もあがる。

吉松：火薬を扱うため取り扱える資格を取得してもらえばいい。

奥村：1級土木施工管理の資格。コンクリート技師、推進など。会社で取り組む仕事、配属で必要になる資格も変わってくる。まず学生時代は

施工管理の資格への意識でいいのではないか。他については、こういった資格があるよと伝えておくことは必要。ITリテラシーも会社として高めていかないといけなくなっている。ITパスポート。勉強の余裕があるのであれば、他の分野などの資格にもチャレンジしてみてもいいのではないか。

當内：技能士の3級、そして2級も取ってもらえれば現場としてはありがたい。樹木医なども挑戦してもらえればいいと思う。

川端：運転免許をきちんと取ってほしい。オートではなくミッション。準中型まで取ってもらってほしい。現場で使用する車はミッションがまだ多い。

野瀬：留学生も免許取得にはかせている。

堤下顧問：ものづくりはしたいが、土木への興味に繋がらない理由は何か。文系人材の現状についてはどうか。

奥村：配属時点で、適性を見て大丈夫だろうという部署への配属をしている。

米良：研修期間が長くなっている。文系学生は分野を決めずに入り、研修を通して学んでいる。

堤下：高校生は建築に対するイメージは何となく持っているが、土木に対するイメージがほとんど持てない。

奥村：身近でなくなった。以前は、身近に土木の人や現場があった。

土橋：高校生に毎年オリエンテーションをしている。そこで土木を知ってもらう機会として測量やドローンを体験してもらい、希望する人は増えた。土木のことを知らない。知ってもらう努力をしないとイケない。

堤下：土木の協会での取り組みは何かないのか。

奥村：取り組んでいるが、人材確保ではなく、行政や国と制度などの話が多い。またPRも単発で終わり、続かない。

野瀬：テレビでも少し土木の情報を流したり、アピールは少しずつ増えている。

堤下：卒業設計審査について説明。

見邨校長：学校運営に今後生かして行きたい

## ● 卒業展について

昨年より、賞を改定している。地道な努力な積み重ねの作品であっても、評価をしていきたい事から

建築・構造・施工・土木・造園それぞれで賞を設けている。教育過程編成委員メンバーに選考していただき、講評もお願いする事としている。ぜひご協力いただきたい。